

## 明日の鑄金を考える

### －産業とアートの可能性－（座談会報告）

日本鑄金家協会

平成15年6月21日から29日まで、高岡市美術館において日本鑄金家協会・高岡市美術館主催の鑄金作品展を開催いたしました。本報告書は、その展覧会初日に美術館ハイビジョンホールで行った同主催の座談会内容を記録したものです。座談会には高岡伝統産業青年会員、高岡銅器産業従事者、一般参加者、学生、日本鑄金家協会員などが出席し、活発な発言のなかから21世紀の鑄金や銅器産業、工芸産業のあり方を模索しようというものでした。

三船：本日の座談会の進行を務めます日本鑄金家協会の三船です。よろしくお願いいたします。  
この美術館の地階ギャラリーで、本日から日本鑄金家協会の作品展がはじまりました。そして、協会では作品展に関連して、初日にこのような座談会を開くことを計画いたしました。これらの事業の後援には、特別に高岡市商工労働部に加わっていただきましたが、これは、美術館での作品展示に止まらず、広く産業と結びつけていこうという協会の考えを説明しご快諾をいただいたものです。また、高岡の漆器、銅器産業の次の世代を担う高岡伝統産業青年会にも後援いただきました。この会は30歳代までの若い方が入会している会で、40歳になったら退会しなければならないという会です。本日はこの伝産青年会の会長、副会長はじめ会員の方々にもお越しいただいています。

本日の座談会は「明日の鑄金を考える」というテーマですが、この座談会では、ある共通の条件のなかで話し合ってみてはどうかと思います。お配りした山崎正和さんの新聞記事のコピーにある内容は、日本では大量生産大量消費社会が終わり、これからは「モノの消費」から「充実した時間の消費」に向かうというものです。このことを若い学生に聞いてみると、そんなことはない、まだ日本ではモノの消費社会が続くと多くの学生が答えます。ではということで、お配りした別の新聞記事のコピーを学生に見せます。そこには、2006年に日本の人口はピークを迎え、その後は減少するという図が載っています。そして、今から50年後には1億3千万の日本の人口が1億に減ると書いてあります。これはおおよそ今の四分の一の人たちがいなくなることになります。更に、60歳以上の占める人口割合は、2000年に25%であったものが50年後には、なんと43%になるそうです。このことは日本だけではなく、イタリアや韓国など多くの国々でも同じ傾向にあります。このことを示してもう一度、数十年後に日本はモノ消費社会か、それとも時間消費社会のどちらになっていると思うかと学生に尋ねると、今度は答えが逆転して、時間消費社会と

答える人が多くなります。もう一枚の新聞コピーには、財力のある中高年をターゲットにした高級スポーツカーの販売の話が載っているわけですが、いずれにしても、これからは人口が減少し高齢化社会になり、モノの消費から時間の消費社会へ変化するということを前提条件にして、それを見据えた鑄金や銅器のものづくりを考えてみようというのがこの座談会の主旨です。また、環境問題も重要になってきましたが、2003年にはすでに、あるブロンズ製品の中の鉛が規制されました。富山ガラス造形研究所の渋谷先生がこの会場にいらっしゃっていますが、先ほどお聞きしましたら、鉛クリスタルガラスはもうお使いにならないそうで、ソーダクリスタルガラスに変えられたそうです。高岡短期大学での鑄造実習でもすでにブロンズから鉛を抜いています。そういったことも考えながら、これからの作品や製品づくりに対してご意見をいただきたいと思います。

では、金沢美大の学生の方、韓国でも将来こういった高齢化社会が来ることをご存知でしたか。

金：知りませんでした。普段の作品づくりにこういった問題を考えたことはありませんでした。

三船：そうですか。では伝産青年会の渡辺会長にお聞きいたします。伝産青年会ではこれまで商品開発研究会を盛んに行なって来られましたが、こういった人口問題を前提として話し合われたことはありますか。

渡辺：これまでの話し合いにこういった前提が入ったことはないと思います。商品開発は若い世代向けのクラフト的要素を持ったもので、50代や60代は案外、対象から外れています。しかし、産業は香炉や花器でやってきていますので、そういう贈答品は年齢の高い方々になります。

三船：どうして、伝産では若い人をターゲットにして商品開発をされるのですか。

渡辺：市場調査がヘタだということもあるのですが、自分たち自身がいいなと思えるもの、使いたいものというところで商品開発をしてしまいます。母親たちの世代がこういったものが欲しいんだろうというところは考えていないんです。

三船：量産型の生型鑄造では、もう機械で鑄型を込める（作る）のを止めたという話を、よく聞くんすが、それは本当ですか。伝産青年会副会長の藪さんいかがですか。

藪：一部ではまだやっているのですが、やめたというのは当てはまらないと思います。

三船：一つの原型で何百というかつての注文が減り、いろいろな原型で20個、30個というような多品種少量生産型の注文に変わったと聞きますが。

藪：それはそのとおりです。

三船：伝産の般若さんいかがですか。

般若：特に（量産型の）シェルモールド中子（中型）がそういった流れになっているようです。千個単位ならシェルはいいのですが20、30個単位になるとシェルを使わなくなります。

三船：では、量産ではなく一品生産の代表のようなものに釣鐘がありますが、梵鐘鑄造の金森さん、注文の傾向は変わりましたか。

金森：注文の傾向は変わらないですね。宗教色が強いので人口問題というのは今のところ、あまり関係ありません。ただ、注文の内容が変わりました。これまでは、こちらからこういう形がありますという発信だけでしたが、最近は、そのお寺にふさわしいオリジナルな形だという向こうからの発信が増えてきました。ところが、発信に応じて少し形を変えてもコストが一気に上がるということもあるんですが、現状ではなかなかエンドユーザーまでそ

のことを伝えることができません。少しくらいの変更でそんなに上がるとは普通思わないわけですね。それで、注文の話がなくなるんですが、これからはそういったユーザーの注文に細かく応えて行かなければ仕事は発生していかないんだと考えています。

三船：ではここで、鑄物から少し離れてガラス工芸の現状や取り組みなどを渋谷先生にお話していただきたいのですが。

渋谷：50年後というような長い範囲では考えていないのですが、高岡銅器の歴史や鑄造技法に興味があってこれまでいろいろ見せていただきました。そして、この高岡銅器を将来どういう方向に持っていこうとしているのか、ニーズに対応しうるのかなど心配な面を感じています。その中で、伝産青年会の若い人たちが行っている商品開発が私にとって興味ある部分でした。ガラス工芸自体、富山県では始まったばかりで、ガラスがこれから地場産業としてつながり、どう展開すればいいのかを考えるうえで、歴史のある高岡銅器が伝統をどのように考えて進んでいくのか興味があり、今日は参加させていただきました。

三船：ガラスの将来も同じ問題を含んでいるのだと思いますが。

渋谷：そうだろうと思います。

三船：では、時間を消費するということがなかなかピンと来ないと思いますので、たとえば鑄物でも金属でもガラスでもいいんですが、時間を消費するための工芸品というようなものを具体的に挙げてみようと思います。何かありますでしょうか。少しクイズのようなことになりますが。特に20代の学生に聞いてみたいと思います。愛知教育大学の学生さんはどうでしょうか。

学生：すぐには思いつきませんが、どちらかというとお茶道具のようなものではないでしょうか。

三船：お茶道具は限られた人のものになりますが、一般の人を考えるとどうでしょう。

学生：すぐには出てこないですね。

三船：金さんのお隣の金沢美大の学生さんはどうですか。

学生：道具のようなもの。たとえば金属であることを考えればオリジナルの自転車であったり、釣竿のようなものであると、皆が使えて、皆で遊べるという、そんなものがあるんじゃないかと……。

三船：オリジナルの道具を使ってその人の好きな時間を過ごす。具体的ですね。もう一人の金沢美大の学生の方。時間を使う鑄物って何かありませんか。

学生：鑄物の商品を私には思いつかないというか。まだ狭い気がして。身の回りのモノを見回しても鑄物のものはあまり無いし……。

三船：福井大学 学生の杉山さんはどうですか。

杉山：昔からあるモノ、作られているモノも、実は、時間を消費するためのものだと思います。それらと、どのように関わるかによって変わってくるのであって……。どのように使って、どのように生かして時間を消費するかということが重要になってくるのではないかと思います。

三船：従来のモノで充分なんだと。どちらかと言えば使い方の問題なんだということですね。では、高岡短期大学 学生の金子さんどうですか。

金子：私にとっては、今日のように、美術館で作品を見ているほうが時間を消費するというか……。私は面白いものを見て感心して時間を費やせるので、そういったことが時間の消費ではないかと思っています。

三船：美術館で作品を見る。そのことが時間の消費なので、そういった作品を作ること自体が時間の消費に関わるということですね。では、鑄金家協会員で東京芸大の森崎さんどうですか。

森崎：作る側と、使う側を分けしないで、これからは使う側の人も作るということが増えていくべきだと思います。具体的には、それまで鑄物に触れたことがない中高年の方が、ある教室で鑄物に触れ面白くなるという……。

三船：今のご意見を展開すると、なにか商品になりませんか。日本鑄金家協会 後藤委員長いかがでしょうか。

後藤：座談会が制作者側と使用者側という対応で話が進んでいますが、時間の消費がすなわち「楽しむ」ということであると考えますと、制作をする側の楽しみを一般の方々にも味わっていただくというような方法もあるのではないかと思います。そのことが進みますと、それに関連する産業へも影響し、鑄金の生きる道も少しは開けるのではないかと思います。実際に、老後の時間を充実したものにしたいと、中高年になって彫刻を勉強に来られる方が今は多くいらっしゃいます。鑄金は金工のなかでも一般の方が一番参加しにくいという面があり、それを取り除く努力、研究をしなければいけないと思います。かつて高岡短期大学がテレビ公開講座で一般の人が簡単に鑄造するという内容の放送をしましたが、そのような努力を全体で絶え間なくする必要があります。今回、劇作家である山崎さんの記事を資料で出されたことは良い方法だと思いました。たとえば経済学者の意見など、我々とは、いわば対極にある方々の意見を参考にするということが、これからは重要なのではないかと思います。

三船：どうもありがとうございました。先ほどの森崎さんのご意見は、使う人が作る、作ることによって時間を消費するということですが、このほかに、鑄金と時間の消費を結びつけるものはございませんか。そちらの方は。

問屋業者：私は銅器の販売をしている者です。最近では鑄金、鑄物がだんだんと一般の方に分かってきてきていると思います。技術が進歩して素材が何かさえも分からないという混乱が起こって、金属の本来の特徴を見失っていると思います。高岡銅器はきれいに研磨仕上げをして着色をする。その一方で、海外から入ってくる鑄物製品は研磨しないで鑄肌を生かしたものが多い。高岡銅器の場合、販路の問題もあり末端価格が高くなる。海外のものは鑄肌でそのまま店頭に並び安い。若い消費者は同じ鑄物なのにどうして高岡のものは高いの、ということになる。これは産地の責任なんですが、研磨と着色で素材感をなくし、そのことで価格が高くなるという悪循環が最近、気になっています。

三船：生活の中に金属らしい製品を置き、それによって充実した生活をするということを提案されているわけですね。

問屋業者：たとえば東南アジアから入る鑄物のガーデニング製品は、鑄バリがあり、そのままパッケージも無しで店頭に並んでいる。そういうところを参考に、これまでのものを見直す必要があるのではないかと思います。

三船：では高岡で原型を作られている船木さんいかがですか。

船木：高岡で、陶芸教室のような、鑄物教室が、場所柄できないのかなあとありますが。昔と違って、簡単に鑄型が作れるそんな材料もありますから、皆さんにどんどん高岡に来ていただいて、陶芸のように鑄物をやっていただくという、そういう場所が必要だと思います。

やはり、一般の方には、鑄物は難しいという先入観がありますね。それをなんとかしなければいけませんね。

三船：そうですね。では韓国からおいでの南さんいかがですか。

南：焼き物みたいに簡単でないので、一般の人は鑄物ができない。そこが難しいところだと思います。

三船：ありがとうございました。では鑄金家協会員で福井大学の宮崎さんいかがでしょうか。

宮崎：時間を消費するということで、直感的に思ったのは楽器、おもちゃなど……。

三船：確かに金属は叩くと音が出ますからね。楽器ではありませんが、金森さんは音の出るものを作っていますね。

金森：楽器ではなく宗教具ですが。鳴り物ということでは、鉛の入らない、鉛レスで錫の多い青銅か、あとは珪素ということになります。音調整というのはかなり難しくなります。

三船：音調整していないベルを8個売って、後はヤスリで削ってドレミファを調音してもらうというのはどうでしょう。

金森：どこをどう削るかなど難しいです。カリオンなんかは調音しますね。

宮崎：とにかく音が出ればいいんですけど。後は、形として質が高いもの。

三船：形の質が高いというのはちょっと抽象的ですが。

宮崎：シンプルで豊かなもの。そういう形態。先ほど、加飾（着色）という話が出ましたが、金属らしさというのは重要で、金属のモノが手元にあるということが形を越えてゆくことになる。そのことは必要で、形としての質の高さが必要なんだと。そういう膨らみのある形を研究していかなければと思います。高岡銅器のカタログを見てそんなことを思ったことがあるんで。

三船：具体的にはどういうところでしょうか。

宮崎：時代には風が吹いているんで、少しはそれになびくというか、時代に合わせるというか、そういう高岡銅器の商品開発が必要なんではないかと思います。カタログを見ても商品がちょっと古い。

三船：先ほど渡辺会長が、伝産では若者対象の商品開発になってしまおうとおっしゃっていましたが、そのことも、従来のカタログには中高年者対象の古いイメージの商品を載せているからだとということなんでしょうか。

宮崎：カタログにも、もうすこし新鮮な形というものがあってもいいんじゃないかと思います。

三船：では鑄金家協会員で長岡造形大学の赤沼さんいかがですか。

赤沼：時間を消費するということで、おもちゃを直ぐに思いつきました。こちらに来る途中、高速のサービスエリアで、鑄物の知恵の輪を見つけたんですが、今、はやっているようです。鑄物なんで結構複雑なやつがあるようです。ただ、海外の鑄造品だと思いますが。

三船：それは大きいんですか。昔は線材で作っていたように思いますが。

赤沼：いや、手の中に入る大きさです。鑄物ですから昔のより少しごつい感じです。最近は鑄物でやっていたモノを鑄物ではない金属以外の素材で作るような現象が起きていますが、知恵の輪のように、逆に、これまで鑄物で作らなかったモノを鑄物で作るということをやってみたらどうだろうかと思います。商品開発の部分で展開できるんじゃないかと思います。鑄物の重さを逆に表に出すような、逆の発想というようなことも必要なんではないでしょうか。たとえば鑄物の携帯電話とか……。たとえばですが。

三船：では鑄金家協会員で愛知教育大の遠藤さんいかがでしょうか。

遠藤：子供のおもちゃでロボットなんか重量感のあるもので考えられるんじゃないでしょうか。  
また、大人用の、重量感のあるプラモデルというものもどうでしょうか。

三船：では鑄金家協会員で東京芸大の白仁田さんいかがでしょうか。

白仁田：具体的な商品としては思いつかないんですが、時間の消費ということを考えたときに、今まで通りに、安いものを買って使うというのは決して間違っていないと思うんです。その方向で、先ほど出た質を高めるということを今、考えているんですが……。具体的にはなかなか出てきません。安いものというのは、従来の大量生産でなければならないし、しかし、使い捨てではないということになります。ですから、使い捨てでなく充分使えるもので、かつ、それが安いものであるということは大事なことだと思います。

三船：あまり高ければ、誰でもが買えないですからね。では鑄金家協会員で東京芸大の長谷川さん。

長谷川：今、商品開発のような話になっていますが、私も直感的におもちゃしか出てこなかったんですが……。ただ、自分が欲しいもの、自分だけのものを探せる時に、やはりそれだけのバリエーション、質、品揃えが必要で、そういったものを出さなきゃ買ってもらえないですから、宣伝活動というようなものは幅広くやることが重要だと思います。

愛教大学生：よろしいですか？ 先ほど、知恵の輪を海外で鑄造しているというようなことが話題に出たんですが、鑄物は生産コストや時間がかかるということで、どんどん海外に生産を出しているようなんですけど、そういうことをやっていたら国内の鑄物がダメになると思うんですが、そういう危機感は業界にはないんですか。

般若：危機感はあるんですが、どうしようもないというか……。多少今の時点では海外のほうが品質は落ちるんですが、だんだん質も上がってきているのも事実です。それは大変な脅威です。同じものを大量に作るのが鑄物だというふうに昔から言われてきていることなので、ある程度の質が保てるなら、安いところでやるのはしょうがないことかも知れません。

三船：学生の立場と、高岡銅器の最前線で働いている方の、両方の意見が出ましたが、鑄造業の渡辺さんは今の愛教大の方の質問をどう思われますか。

渡辺：私どものような美術工芸鑄物ではなく、自動車の部品などの大量生産鑄物、すなわち最先端技術の鑄物というのはもうすでに海外にでてしまったというのが事実なんですね。工業部品のような大量生産鑄物は出てしまっているんですが、美術工芸の鑄物も、大量生産で行くなら、いつ海外で生産してもおかしくないという状況だと思います。従って、国内の鑄物産業の空洞化は避けられないんだと思います。

三船：先ほど、長谷川さんがおっしゃった自分だけの鑄物製品を選べるということと、般若さんがおっしゃった鑄物は同じ製品を作るということは、少し反することなんですが、昨年12月に実施した、合同勉強会のことを、藪さん少し話していただけますか。

藪：伝産青年会の会員と高岡短大の学生と第1回目の合同勉強会を行いました。生型鑄造でペン皿とトレー鑄型を作り、その鑄型に模様を描いたり、ガラス玉を鑄型の中に入れたり、植物を押し付けたりと、一つの原型から大量に同じものを鑄造する本来の生型鑄造ではなく、それぞれの文様が異なる一品制作の生型鑄造というのをやりました。安価にできるオリジナルの一品制作というものです。会員は日頃、鑄物産業に従事している者や漆器産業に従事している者ばかりで、どうしても仕事では思い切ったことはできないんですが、学

生はそういうこだわりがなく自由なことをやります。ですから、会員はそういうところにおおいに刺激を受けた勉強会でした。ということで今年も同じような勉強会をしようと考えています。

三船：これは短時間で大量に、すなわち安く一品製品ができる鑄造方法で、長谷川さんや白仁田さんの話につながってきたので、ご紹介いただきました。では、ここで高岡市美術館学芸員の山本さんに、少し違ったお立場からご意見を伺ってみたいと思います。

山本：お話を伺って、若者と高齢者の嗜好のことで気になったのですが。たとえば、今の便利な時代に育った若者の嗜好は、歳をとっても変わらず同じ嗜好だという世代論でいくべきなのか、あるいは、世代に関係なく人間はどんな時代でもある年齢になると嗜好が変わって高齢者に共通した同じ嗜好になると考えるべきなのか、どちらなのか少し疑問に思いました。もう一つは、皆さんのご意見に接して考えたことです。アートの考え方は、コンピューターは2年で古くなるが、芸術は1万年経っても変わらないというもので、ラスコーの洞窟壁画は何万年経っても偉大な永遠の芸術であるわけです。一方、デザインの人の考え方は、一瞬一瞬の時代の変化と共に生きていくわけで、1年経ったらもう古い、10年経ったら忘れ去られるということで、時代遅れを非常に恐れている。では工芸の方たちのポジションはどこにあるのでしょうか。ちょうどアートとデザインの間位におありなんではないかな。そんなことを考えていました。

三船：世代特有の嗜好があるのかということですが、一方では、歳をとるとみんな肉類を食べなくなるというような問題と同じなんではないかな。では渋谷先生いかがですか。

渋谷：今の若い世代の人たちが、これから30年経ったら、やはり30年後はかなり違う考えを持っているのではないかなと思います。私自身も、昔の40代の人と比べると、全然モノの見方とか趣味的なことなど違うと思いますし、これから時代が経つに従ってどんどん変化して行くと思います。

三船：16歳、17歳から携帯電話を使う世代と、歳をとってから携帯を使う我々の世代とは違うかも知れませんね。では後半の、工芸はラスコーとデザインの間位に居るのではないかなという山本さんのご意見ですが。宮崎さんどうですか。

宮崎：いやいや、工芸だってラスコーかなと……。デザインだろうと、ラスコーだろうと質的には変わらない。いいものは残って行くし。一瞬一瞬という追いつかれた状況は変わるけど、デザインも、大量生産、大量消費という裏づけの中で動いているのであって。これからは、自分なりに時間をかけてちゃんとやって行こうかなと思っています。

三船：では、福井大学の学生の方、こういった時代変化の中で、何か鑄物の商品を提案できませんか。

学生：最近、はやったチョコエッグの中のおまけを鑄物で造るというのを考えたんですが。

藪：動物の精巧なフィギアみたいな。

三船：外のケースも金属ですか。

学生：外はチョコレートでも何でもいいんですが。

三船：当りは銀の精密鑄造で作った素敵なものとか……。では、そちらの方は鑄物関係の方ですか。

一般者：全く関係ないわけではないんですが。若い人がどんな考えなのか興味があって入りました。私のような年寄りからみると、昔は職人さん、今は作家と、どういうふう到大別され

ているのか……。なにか、仕事場でも作家の看板を出さなければ商品が売れないような、そういうことが今あるんじゃないでしょうかね。昔は職人さんといえば街角で、銀細工ならトントン叩いて彫金のお店がたくさんあったわけです。いまはそれでは生活できないので、作家というもので、展覧会で何か称号というようなものを取ったら有利ということがあるんじゃないでしょうか。伝統産業ですから、古いものは形を変え材質を変えて来ているわけですが……。昔、東京で筆筒の鍵だけを作ったお店があったんですが、100本あれば100本とも違うものを手で作るわけです。こういうのは職人の技ですが、こういうものを見ると、作家さんより素晴らしい職人というのは居るんじゃないかと思います。

三船：今、作家と職人という言葉がありましたが、テーマの「アートと産業」というところに結びつくのではないのでしょうか。では、この作家と職人というのは、かなり離れていますか。距離がありますか。

一般者：作家ならそれによって、商売にプラスになる。作家としての名前が売ればもっとプラスになる。そういうことを考えればかなりの差があるんじゃないでしょうか。

三船：今、重要で面白い提案があったと思うんですが。昔は職人だけだった。それがどんどん作家が増えた。作家になっていくことによってたくさんお金がもらえるようになる。高く売れる。そういうことが現在まで続いてきたわけですが、では、将来、人口減少、少子高齢化社会になった時にも、今のような作家と職人というような棲み分けは続くのでしょうか。赤沼さんどうでしょう。

赤沼：うーん。棲み分けが続くかどうかは分かりませんが。今後の製作のプロセスの段階で、作家ばかりではモノは作れませんから、両者が並存する状態は続くと思います。今は、作家だから売れるとは限らないでしょうし、欲しいと思えるもの、良いと思えるものを確実に作れる人がこれからは生き残れると思います。

三船：では般若さん、作家、職人両方のお立場からいかがですか。

般若：経済的にバブルのような頃はもう来ないでしょうから、職人的な仕事は人件費の安い中国や東南アジアへ出すような時代だと思います。やはり、すこしでも高く売ろう、付加価値を高めていこうという方々は、どうしても作家に移行するんじゃないでしょうか。

三船：鑄金作家、銅器職人と考えた時に、もしこれから、売れる鑄物を作ることができなければ、数十年後には鑄金作家も、銅器職人もいなくなるわけです。今までのように職人がどんどん作家になっていった時代ではなく、両者がそろって消えていくようなことがいろいろな工芸分野で起こる、そんな時代ではないかと思っています。ですから、今、多くの知恵をだして対処しなければならいんだと思います。では、もう一度、振り出しにもどって、「こういうものを作ればいいのか」という質問をします。どうでしょう。

赤沼：よろしいでしょうか。鑄物教室という話が出ましたが、今、作るということに多くの人が興味を持っていると思うんですね。銀粘土なんかは、高校生のなかでも、ブランド風のものが作れるということで人気が出ています。実は40代、50代の女性にも人気があるんですね。何故人気が出たかという、10年前はオーブンで焼けなかったものが今は焼けるようになって、手軽に取り組めるようになったんですね。そういう流通に乗せやすい技術開発というようなものをやるべきではないでしょうか。精密鑄造で簡単に作品ができるようになればと思うのですが。

宮崎：10年前に鑄物教室をやっていたんですが、お茶をやっている人に人気がありました。やは



り、茶道具の蓋置きなんかを作りました。

三船：具体的に作るものは、もう出てきませんか。鑄物を体験してもらうという方向に話題は傾いていますが。渋谷先生、ガラスなんか教室を開くと多くの人が来られるでしょうか。

渋谷：そうですね。バーナーワークなんかやると簡単にできるので主婦の人が継続的に来られます。そのことによって裾野が広がり、たとえば吹きガラスをやってみたいという人が出てきます。

宮崎：ガラスと金属とか、金属と漆とか、複合素材の製品を考えればデザインが広がるんじゃないかと思いますが。

渋谷：他素材を併用するような中から、新しいものが生まれてくるようなところがありますし、あとは建築関連とかに結び付けて行くなかに市場があるんじゃないかと思います。

三船：伝産青年会でもガラスと金属を組み合わせた商品開発をやっていたのではなかったでしたか。

渡辺：伝産青年会として開発し商品にしました。その後は、伝産青年会としてではなく、個々の会社が富山ガラス造形研究所と共同でやっています。商品開発では銀の板を切り抜いて、ガラスを吹き込んでもらって、シュガーボットを作りました。

三船：どうして銀の鑄物ではなくて、銀の板材を使ったんですか。

渡辺：たまたま銀細工で加工する者がやったので。鑄物だと取っ掛けにくくて、発想に無かったです。

三船：昨年の高岡短大の卒業制作で、鑄物にガラスを吹き込んでもらって、照明具をつくった学生がいましたが、伝産青年会では、ガラスの他に異素材との複合製品を開発されたことはあるんですか。

藪：鑄物に漆とか、金属部品に漆の組み合わせなど、これまでに開発した商品には出てきていません。ただ、発想にはあるんですが、途中で断念とかそういうことはありました。

三船：そうですか。では、金さんこれだけの情報を聞いて何かありますか。

金：家具を作ったらどうかと思いました。脚を鑄物で作ってクッションを乗せて座る椅子とか、化粧台の枠を鑄物でつくってガラスとか鏡を嵌めるとか、そんなものを考えました。

三船：高岡銅器の商品で脚を鑄物で作るといようなものはあるんですか。

渡辺：どうでしたか……。

金：韓国にはあるんですけど。少し前、韓国で、はやっていました。

三船：韓国の筆筒は真鍮の金具ですが、韓国で鑄物製品というのはどういうものがあるんですか。

金：韓国では良く分からなくて、日本に来たんです……。実は、私は、真土型鑄造（伝統的な陶製鑄型法）に興味があって来ました。韓国ではもう真土型は無くなってしまいました。今は、日本と同じ近代的な鑄造方法です。でも、今思えば韓国では、日本よりも生活の中ではたくさん金属を使っていると思いました。

三船：釜山出身の金さんの意見でしたが、高岡短大の学生でソウル出身の張さん、いかがですか。

張：韓国では、家具は木や漆の方が、金属よりも高級な感じがあります。新婚の人は金属の金具の付いた家具を使いますが、年配の人は木や漆の家具を使います。

三船：そうなんですか……。では、この会場には制作者の方が多くいますが、使い手側の立場から、山本さんに高岡銅器へのご意見をいただきたいのですが。

山本：やはり現代生活のなかで如何に使用されていくかということじゃないでしょうか。先ほど、

異素材やあるいは建築空間とのコラボレーションということがでていましたが、他分野のことを学んでいかなければならないという課題なんでしょうか。また、皆さんも作りながら使っているわけですから、制作者であり使用者であると思います。

三船：では伺ってみましょう。この中で、鑄物の製品を毎日使っているという方はいらっしゃいますか。

一般者：私のところはお茶をやっていますから、茶釜とかそういうものは使っています。お茶の世界では、結構金属製品を使います。先ほど、世代の好みというような話がありましたが、私なんか、歳をとって親の好みにだんだん似てくるんです。昔に回帰するというか。家屋にしても、使う家財の道具にしても嗜好が親の時代のものになる。そういうことを考えると、かえて古いものがヒットすることもあるんじゃないでしょうか。

赤沼：古民家ブームというのがあって、若い人が古いものに興味を持っています。太い梁とか煤の付いた古い柱とか、本物志向というのか、そういう意識が若い人に芽生えてきています。とはいっても、価格が高ければ誰にでも買えるものではないんで、そういった問題はあります。モノを見る眼はだんだんと肥えてきているんじゃないでしょうか。今は、モノが氾濫し薄っぺらになってきていますから、その逆にある鑄物の重厚さを生かせればいいのではないかと思います。

三船：では、長谷川さん、自分の作った鑄物製品を使っていますか。

長谷川：花器なんかは使っています。楽しみですよね。これは今日の一番最初に出た、時間の消費につながるんじゃないでしょうか。

三船：工芸品を使うことが時間の消費ということですね。さて、森崎さんは家のなかで使うにはちょっと大きい鑄物の作品を作られていますよね。使い手側に立つと自分の作品はどういうふうに見えるんでしょうか。

森崎：産業を考えると日常性ということが大切になるんですけど、ある意味、非日常性のなかにも価値というものがあって、そういう方向性も捨てがたいと考えています。必ずしも美術館だけに展示することを考えているのではなくて、街の中のパブリックアートなどとしても志向しています。

三船：学生のやっている鑄金と、プロがやってる鑄金は少し違うと思うんですが……。プロが毎日仕事をしていると新しい発想をしようとしたときに、その技法が邪魔をするというようなことはないですか。渡辺さんどうでしょう。

渡辺：そうですね。従来の鑄造方案（金属の流れ込む道を作る計画案）は私の頭の中に入っていますから、これまでやってきた鑄造方案を変えんということはなかなかできなかったりします。ものづくりをしていても何かに囚われているというか、冒険心がなくなってきたらというか。そういう気がします。

三船：金森さんは梵鐘専門ですが、この問題はいかがですか。

金森：新しいものを作ろうというときに、どうしても、その技法でできるものというところから入ってしまいます。銅器団地の組合で新商品開発に携わったことがあるんですが、銅器団地の中でやろうとすると先ず素材（技法と材料）があって、その素材で何ができるんだらうということになってしまいます。本来ものづくりは、こういうものを作るにはこういう素材を使ってということなんですけど、逆なんです。ですからできるものが限られてしまう。金属で何ができるだらうというような考え方しか出てこない。そんななかで、金属の重い

というデメリットを武器にした商品開発も結構やったんですけど、実際に何を作るかというに出てこない。過去には栓抜きとかワインオープナーとかやったんですけど、流通まではなかなか行かないという問題もあります。

三船：般若さんいかがでしょうか。

般若：私の会社では、新しい技法やものづくりを取り入れようという考えはあるんですが、失敗が積み重なっていくと、どうしても新しいものに挑戦しようという意欲が薄れていくことはあります。失敗すると前のままでいいかということになり、材質の面でも鉛を減らそうとか、釣り（金属を流れやすくする仕組み）を減らそうとか、そんなこともなかなかできなくなります。

三船：今までうまくいっていたのなら、合金の成分を2%変えることもなかなかできなくなる。そんなことを聞くと学生の人は、不思議に思いませんか。金沢美大の学生の方どうでしょう。

学生：私なんか他人がやってないようなことをやってみよう、そのほうが面白いかなというほうが多いように思いますので……。

三船：おそらく学生はそういう考えの人が多いと思います。それだから業界の人は、学生の考えに触れようとするわけですね。それが商品開発につながるんじゃないかと。毎年入れ替わる学生の新鮮なアイデアを参考に商品開発しようということなんですが、それではいつまで経ってもダメなんじゃないかと思えます。努力をして、業界自身にそういった実力をつけていこうとしない限りは、ダメなんじゃないでしょうか。また、学生はこういう状況を理解して、業界のなかに思い切って飛び込むということも重要なんだと思います。

鑄造業者：私は、昔、焼型（込型）をやっていて、今はガス型鑄造をやっています。高岡銅器のものづくりは分業化になっているので、今日の座談会のテーマと少し違うかなと思って来ました。高岡は、鑄物は鑄物、仕上げは仕上げ、着色は着色という分業なので、（全工程を手がける）鑄金家とは違うかなと思いました。

三船：昔から、分業制は確立していますが、今後、社会が変わるとき、この分業制は良い方向に転換できますか、それとも重荷になりますか。

鑄造業者：うーん……。行きかたとしては、工房的（鑄金家的）な行きかたと、工場的（分業的）な行きかたとに分かれてくると思うんですが。高岡短大の学生のやっているようなことは、一つの工場的やりかたかなと思って見ていました。高岡にあるのはほとんどが工場的な行きかたですから、工房とはちょっと違うし。そう思って今まで聞いていました。私の家も息子が跡を継いだので、若い人の考えを聞きに来ました。これからは、自分たちのような考えばかりではダメなのかなと思って……。

三船：確かに、これまで、作家と職人という見方しかしなかったんですが、分業制についても考える必要がありますね。ありがとうございます。えー、私が考えた時間を消費する商品なんですが、鑄造した花器の中型も落とさないで、ヤスリと紙ヤスリをセットでつけて売り、買った人が仕上げる。どうでしょう。時間は消費できて、ヤスリで形を作って自分だけの花器を作る。先ほどの問屋の方、いかがでしょうか。

問屋業者：うーん。ちょっと……。

三船：売れませんか。銅器の裾野が広がり、やがては、そういう人が鑄造を体験しに高岡へ来る。観光資源になります。受け入れの整備も必要です。こういった交流から業界が活性され、

職人の本物の仕事が正しく評価される。活気が生まれると思うんですが……。市役所の荒木さんは高岡の方ですが、使用者の立場からどうですか。ご自宅で銅器を使われていますか。

荒木：昨年、高岡短大の学生が交通安全モニュメントを作る仕事に携わり、初めて鑄物がこうやってできるんだと知ったんですが、実際に生活していて、こういうものが銅器なんだという意識は余りありません。漆器のお盆なんかは生活で使っているんですが、生活のなかに銅器はほとんど無いという感じです。

一般者：参考になるかどうか……。高度成長期の頃ですが、クルーザー（船）の装飾金具を作る仕事がありました。こういったものは工業鑄物ではないので、デザインや加飾など高岡向きの仕事なんですけど、案外、仕事というものは意外なところにあるもんなんではないでしょうか。

三船：ありがとうございました。では、この座談会を取材されている新聞記者の村上さんいかがですか。

村上：私ですか……。叔母の家が金屋町にあり、子供の頃、よく遊びに行っていました。叔母の家も昔は銅器の仕事をしていたんですが、今はもうしていません。金屋町には今も、銅器の仕事をされている方が多くいらっしゃるんですが、後継者のいない家は、10年、15年すると仕事をやめるようになるとよく聞かされていました。私はそういう家に育っていないので、第三者的な意見になってしまうんですが、高岡に長く続いてきた産業なので、これからも続いて行ってほしいと思っています。後継者が減っている一方で、これからはこうやって、やっていこうという方がいらっしゃるの、私は、記事を書いてそれをバックアップして行きたいと考えています。

三船：ありがとうございました。これでほぼ全員の方に発言いただきましたが、最後にこの座談会を撮影していただいた鑄金家協会員で高岡短期大学の清水さん、いかがですか。

清水：商品開発の話が出ましたが、日本の生活のなかでは、あまり鑄物が使われていないという印象があります。鑄物を知らなさ過ぎるということもありますので、そういった面では、まだまだ鑄物が浸透して行ける余地があるんじゃないかと思います。鉛レスが考えられていますので、これからは食器の分野にも進出できるんじゃないかと思います。以前、中国に行った時、建物一軒まるまる鑄物でできているのを見たことがあります。そういう発想で、とりあえず身の回り全部を鑄物で造ってみるというのはどうでしょう。そういうなかから選択するという……。生活空間全部を鑄物で埋めてみるということも、いずれやってみたいと思います。

三船：ありがとうございました。本日の問題を一番真剣に考えているのは、次の時代を担う伝産青年会の方々だと思います。こういう仕事に就くかどうか分からない状況で学生が発言されることと、これまで商品開発や話し合いを何度も繰り返してこられた伝産青年会の方が発言されることでは、少し、質が異なっていると思いますが、これからは、鑄金作家としてばかりではなく、どうすれば鑄物産業、銅器産業が発展するのかを、伝産青年会の方々と同じ気持ちになって、真剣に提言していただきたいと思います。最後に、こういうお願いをして、この座談会を終わります。ありがとうございました。

### <編集後記>

三船温尚（日本鑄金家協会 北陸地区委員、高岡短期大学）

参加者は事前に一切の内容予告を受けず、また、どのような方々が参加されているのか分からない中で、少子高齢化、人口減少時代の「時間の消費」をキーワードに、新たな鑄金作品や銅器製品を一人ひとりが具体的に提案するという内容で、この座談会は進行しました。そういった進行の隙間から、海外での鑄造に関する銅器従事者と学生のやりとりや、高齢者の嗜好の変化に対する意見、商品開発への取り組みなど、多くの興味深い話題がにじみ出てきました。異なる立場の方々の意見を同じ空間で共有し、深く考えることは、それまでのモノの見方や考え方が変わり、全く新たな発想が可能になります。そういったことを予感させるに十分な、真剣で熱心な意見が交わされた座談会だったと感じています。

今後の高岡銅器を考えれば、座談会のなかで多くの方が発言された「高岡での鑄物の体験」を具体的に一步前に進める時です。「時間の消費」はサービスを受けることでもあります。高岡市の観光と結びつけた、鑄物体験というサービスの実現を、今、真剣に模索しなければならないと考えています。

日本鑄金家協会は、明治40年に「東京鑄金会」として創立し、昭和21年に「鑄金家協会」、そして平成10年に現名称に改称してきました。本会は平成6年以降、高岡市において鑄金作品展、講演会、シンポジウムを開催してきましたが、今回のような出席者全員が活発に意見を交換する座談会は初めての試みでした。日本鑄金家協会は、鑄金と最も関連深い街、高岡でこういった活動を今後も継続し、日本の鑄物産業、鑄物文化の発展に寄与したいと考えております。